
失くしたのは大切な、

ログ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失くしたのは大切な、

【Nコード】

N3579Y

【作者名】

ロゲ

【あらすじ】

忘れられないのは、まだ好きだから。

第一話

「ただいまー」

私の声が聞こえてくると、小さな足音がパタパタ奥からやってくる。

「おかえい」

「ん、ただいまー。いい子にはあばの言うこと聞いてた？」

「うん！ ひーくんいい子だった！」

「よし！」

ひーくんこと弘樹の頭を撫でてやると、満足しているのか嬉しそうに頬を緩めた。

我が子ももう三歳。ばたばたとした三年だったけど、それでも今こうして幸せに暮らせているのは母のおかげだろう。

今だって、パートに行っていた私のかわりに弘樹を見ていてくれていたのだ。

リビングに行くと、今年でもう48になる母がゆったりとソファに座っていた。

「おかえり」

「ただいま。ありがとう、弘樹みててくれて。お母さんのもご飯作るから」

「いいわよ別に。あんた夜も仕事でしょ」

まあ、女のまともな稼ぎで暮らしていけないのは世の常。子供のためと、母への恩返しのためにと夜の仕事を始めたのは2年前だ。

「大丈夫。座ってて」

「……あんた、無理しすぎじゃない？ たまには休めば？」

「大丈夫だって。今は弘樹のために頑張るのが生きがいなんだから。そう言っても、まだ心配そうに母は私を見つめてくる。そんな母の膝に、弘樹がちよこんと座った。

「……男、どこにいるかそろそろ言いなさいよ」

「嫌だよ。お母さん、殺しにいきそうだもん」

「ええ、ええ。殺しますとも。うちの一人娘にこんな思いさせてんだからね。だいたい、責任取らないなんてことがおかしいのよ」

「あはは。仕方ないよ」

四年前。大切な恋人が居た。その人は有名だけど、有名じゃない人。憧れてて、好きになって、それでもダメだった人。結婚を、本気で考えた人。

でも。

他に、私より大切な人が居た人。

本当は、あの人との子である弘樹は、墮ろさないといけなかったんだろうけど。私には無理だった。あの人との子供を育てたかった。幸運にも、この子の存在を知ったのは、彼と別れたあとだったから、彼はこの子の存在を知らない。

先に連絡を絶つたのは私。弘樹を育てようと決意したのも私。

だから、頑張らないと。

「ほんつと。あんたもあたしに似て、難儀な人生送ってるわ」

「しょうがないね、お母さんの子だもん」

「ばあば。くうま！」

「あらひーくん。これはなんて車なの？」

「みきさーしゃ！」

幸せな光景。でも、私の胸にはぽっかりと穴が空いたまま。

この四年、まだ彼を想っている。

親とは離れて東京で一人暮らしを始めてからの、この高校二回目の冬。

いつもの学校帰り、のはずだった。

「えーっと……」

部活は特にしていない。それは私が面倒臭がりだから、と言っ飛ばせばそれで終わりだが、実はバイトをしているからで。いや、していなくても部活なんてしないけど。

いやいや。今のこの時点での問題は、この人が生きてるか死んでるかだ。

「あの、生きてますか？」

目の前に転がるように倒れ込んでいる男の人。ここは市街から離れた閑静な住宅街だから何もされなくて済んでいるもの。これが街中なら最悪だ。

「おーい」

「……ん」

生きてはいるようだ。とりあえず生存を確認。優しく頬を叩いてみる。

「あのー。風邪引きますよー」

「う……ん？」

男は目を開けて、ゆっくりと上体を起こした。

その顔から察するに、どうやら彼は寝ていたらしい。なんとも迷惑な寝方だ。寝るのなら場所を選んでほしい。

「あ、えっと。どなたですか？」

ぼんやりとした瞳で男に問われた。

短めの黒髪に大きくない二重の目。小さくある儂げな泣きぼくろとは裏腹に、しっかりとした体格の男だ。

「それはこっちのセリフです。あなた、こんなところで寝るほど睡眠とってないんですか？」

「え？ あ、寒い。俺、寝てたんだ」

「ええ。早く家に帰ることをおすすめます」

「いや、今帰れなくて……」

私は、なんていうか。その。捨てられた子犬、とか。放っておけない性格で。だから、そんなコトを言われてしまうと……

「……不本意ですが、私に半径一メートル近づかないのであれば我が家にお招きしますよ」

瞬間、男の顔が曇る。

「……馬鹿ですか」

「人の善意を馬鹿呼ばわりするクズはそのまま凍死するのが当然の報いですよわかりました」

「いや待って！ 違う違う！ ごめん！ でも、こんな不審者家に上げるとか言うから……」

「あのねえ」

くだらない。こつちだって伊達に17年生きてないんだから。

「その人が悪人か善人かくらいわかります。分かったらうだうだ言うてないでとりあえず立ったらどうですか？ 私早く帰りたいんですけど」

「え、あ、はい」

あっけに取られたように、男はポカンと口を開けるとゆっくり立ち上がった。

私が歩き出すと、男もおとなしくついてくる。まるで犬の散歩みたいだ。

「あなた、名前は？」

「あ、笠井春樹かさいはるきです。えっと、あなたは？ って、聞いても、いい

ですか？」

「沖田爽香おきたひやかです。……いちいち遠慮するのやめてください」

「は、い。すみません」

シユン、と。落ち込んだ笠井はまさにワンコだ。成人男性が高校生に負けるなんて、なんとも不甲斐ない。

私の家は、一人暮らしのために狭い。1DKの作りだ。親からの仕送りはあるが、なるべく負担を減らしたいし、ここの広さで充分だ。

笠井は物珍しそうにキョロキョロとしている。

「……別になんにもありませんよ。座って、これ着て、コーヒーいれます」

「え、いや、そんな」

「いいから座れ」

「……はい」

厚めのちゃんちゃんこを渡し、コーヒーをいれにキッチンに向く。と言つても、すぐそばなんだけど。

はあ。なんで私、こんなにお母さんになつてんだろ。

コーヒーメーカーを起動し、笠井の元に戻る。

「あの、すいません。迷惑かけて」

「ほんとにね。というか、敬語、やめてもらえませんか？ 私、年下なんですけど」

「え、あ。はい。いや、うん。ごめん」

「寒いな……ちよつと着替えます。いつまでも制服とか拷問ですか」

「じゃあ、俺後ろむいとく」

さすがにそのあたりは分かっているらしい。……それなら道で寝るなんてこともやめてほしいけど……。

「着替えました。もついいですよ」

ジャージに着替えた私は笠井の隣を通り、コーヒーをいれに再びキッチンに入った。背後から笠井の視線を感じる。

「……視線を、感じる。」

あ。

「なにか？」

「あ、いや、高校生には思えないな……って思って。しっかりしてるよ」

「……まあ、若年寄ではありますが」

「いやいや違う違う！ 俺は落ち着いてるの良いと思うよ！ うん。今どきのキャツキャした子は苦手なんだ」

その顔は別に私をけなした訳ではない、と必死に訴えている。

「そうですか。それはありがとうございます。でも、男の人ってキヤピキヤピした子が好きなのかと思ってました」

「みんながみんなそうじゃないよ」

僕は落ち着いた子が好き、と、なんの他意もなく笠井は伝えてくる。

まあ、そんなことはどうでもいいのだけど。

「笠井さん、いくつなんですか？」

「え？ あ、今年21になった」

「あー。妥当な年齢ですね」

「……あの、さ」

「はい？」

「コーヒーを渡すと、ありがとう、とゆるく微笑んだ。まあ、少々童顔ではあるかな。もとより男の人は実年齢より若く見られるようだけ。」

「なんにも聞かないんだね」

「いろいろ聞いてますが」

「ちがくて。なんで帰れないのか、とか」

ああ。そのコトか。

笠井は自分で切り出したものの、やっぱり聞いてほしくはないのが表情を曇らせた。聞いてほしくないなら言わなきゃいいのに。

まあでもこれもどうでもいいけど。

「興味ないんですよ。他人の事情とか、考えるのも面倒くさい」
昔からそうだった。

何にも執着したことなくて、何にも心惹かれなくて。だから彼氏が出来てもいつも振られてしまう。最後には「俺のこと好きじゃないんだろ？」と言われてしまうのだ。

私の基準では「好き」の部類でも、周りからしたら「普通」の部類なんだそうだ。

ともあれ。無関心は今に始まったことじゃない。

「なんか、そう言われると話したくなる……」

「え。厄介な人ですね」

「沖田さんには言われたくないよ」

「……はあ。その帰れない理由が、実は御曹司で家が嫌になって逃げてきました、とか言う王道なものならとりあえず殴りますよ」

「違う。えつと……「藤遥斗」って知ってる？」

その聞き覚え有りすぎる名前に、私は笠井の後ろの本棚を指さす。

「知ってますよ。私ファンなんです。あそこの漫画、全部「藤遥斗」のものですし」

「えー!? あ、ほんとだ。うわ、嬉しい」

「……え。この流れはまさか……」

「俺、その「藤遥斗」なんだ」

ん? え?

「ええ!?!」

「ご、ごめん。驚かせたよね」

「……嘘、ですよね?」

「ごめん……ほんと、で」

嘘。嘘嘘嘘。

この男が、あの、「藤遥斗」!?

「嘘でしょ!? 笠井さんがあの素晴らしいアクションを描いて評価も高いのに表に出ようとしない「藤遥斗」!?!」

「うわ、照れる」

「照れないですよ! むしろ嘘って言ってよ!」

「なんで!?!」

信じられない……あの藤先生がこんなに近くに居るなんて……。

「サ、サインください! 大ファンです! 漫画全部持ってます!」

「え、はい」

差し出した漫画にスラスラとサインを入れる笠井。少し戸惑っているようだ。でもそんなの関係ない。嬉しい！あの藤先生とお話出来るなんて！

「はい、出来たよ」

「あ、ありがとうございます！」

うわあ、うわあ！ どうしようどうしよう。嬉しい！何か泣けてくる！

このサインはまさに、今まで応募でたくさんハガキを出して手に入れたサインとおんなじ！しかも今回は生！

「う、嬉しい！ どうしよう！ 今なら死ねる！」

「いや、やめてー！」

「だめ！ 笠井さん！ あ、握手してください！」

「は、はい！」

もう自分が何を言ってるかわからない程には興奮していた。だって、ずっと好きだった。憧れていた。

握られた手は大きく、この手がおの漫画を描いてるのかと思うととてつもない感動が押し寄せる。

「うう……」

「え、お、沖田さん！？」

あ、涙。

止まらないそれはただ流れて。

「すみません。すごく、ほんとに、嬉しくて……」

「あ、うん。ありがとう。あの、泣き止んで？」

「む、無理……です」

「うーん、じゃあ」

情けない。さっきまでは私、この人に冷たくあたってたのに。情けない。

「……あの」

「ん？」

「泣かせたいんですか？」

「泣き止んでほしい」

「逆効果ですよ」

ふわりとしたマルボロの香りに、この人タバコ吸うんだな、とか思うと同時に自分が何をされているか理解した。

抱きしめられてる、とか。

あの、藤先生に。

「ギャップ可愛いなあ」

「は？」

ぼそつとつぶやいた言葉に、つい反応してしまった。

だって。今……。

「沖田さん可愛いんだから、こんなこと男に簡単にさせてたら、もっと悪いことされちゃうよ」

ゆっくり離れながら笠井はつぶやいた。コーヒーを飲み、一息つく。

「するつもりなくせに」

「あはは。僕はね」

でもほかの男はわからないよ。と、笠井は笑顔で続けた。

だから私は、そうですね。とだけ返した。

「で、続きだけど。今やっと次の話描いてまったりしてたのに、担当が「次描け。お前は描くの遅いんだから！」って言うからさ。逃げてきたんだよ」

「……な！ 次を出した！？ よ、読まなきゃ！」

「あ、そこなんだ。変わってるね」

「笠井さん。逃げたならいつまででも居て構いませんよ。でも一メ

ートルは近づかないで下さいね」

「俺のファンでもその扱いは変わらないんだ」

「当然です」

その日、結局笠井は帰っていった。なんでも、熱狂的なファンに会えたからやる気がでたそう。少し、本当に少しだけ、嬉しかった。

た。

それから四ヶ月。あの日から、笠井はたびたび私の家を訪れた。うん。正直、最初は嬉しかったけど、なんていうか。

邪魔。

「ちよつと春！ 勝手に雑誌読まないで！」

「えー。じゃあかまってよ。さつきから勉強ばっかじゃん」

「学生の本分は勉強です！」

「えー」

ガキですかあんだ。

つたく、21の男が「かまって」なんて、馬鹿らしい。

おまけに人のベッドに横になって。

「……さやー」

「はい？」

「あの告白、どうなったの？」

あー。またその話ですか。

実は先日。このアパートの下で待ち伏せしていた学校の男子に告白されているのを、春に目撃されてしまったのだ。しかもそれは一度ではない。そんなことは今までに何度かあつて、そのたびに「なんて返事したの？」とか聞いてくる。

「……断りました。好きじゃないし」

「ふうん」

興味ないならぜひ聞かないでほしい。

だいたい、私が好きなのは目の前にいるこの男だ。「憧れ」と「好き」は紙一重なんてよく言うけど、それが本当だと、この人を好きになって初めて知った。

ああ、もう。人の気も知らないで。

「もう春だなー」

「ですね」

「三年だね」

「ですね」

「就職？」

「もちろん」

「……県外？」

「あー。私、就職は地元がいいなって思ってるんで」

「県外かあ」

雑誌をベッドに放り投げると、脱力したように四肢を投げ出した。それ、私の雑誌……。

なぜか黙り込んだ春が気になりながらも、私は黙々と勉強という名の宿題を済ませる。

……ん？

「なんですか？」

いつからか見られていたようで、顔を上げるとすぐに目が合った。

「うん。さやさ、もしかして彼氏つくんないのって、地元帰るから？」

「……まあ、そんな感じですね」

そういうことにしよう。どうせ、叶うわけない。春には彼女が居る。この間街で二人で見かけたけど、それは「友達」の距離じゃなかった。

……私、馬鹿みたいだ。それでも好きなんて。

「そう……遠恋とか、無理なの？」

「……だって、絶対続くわけじゃないです。男か女が浮気して終わりですよ」

「冷めてるなあ」

「現実的ただけです」

よく聞く話だ。遠恋じゃなくても浮気はあるのに、距離が遠くなればなおさらに。埋められないものはある。

だから、私もこの気持ちを伝える気はない。

いつかは冷めるだろうから。このまま時が過ぎて大人になっていくと、きっと「あんなこともあったなあ」なんて思えるようになる

だろうから。

「ねえ、さや」

「……あれ。ここ間違ってる。自信あったのになあ」

「遠恋もうまくいって知らないの？」

「うるさい。ちょっと待って。えっと……ここが違うのかな……あ。うわ。単純な計算ミスだ」

「俺とさやとか、100%うまくいくよ？」

は？

思わず赤ペンも止まる。

だって、今、なんて言ったの？

「うわ、なにその顔。俺の気持ち知らなかったとか言わないよね？え、さやって鈍い人だったの？」

驚いた顔のまま春を見つめるとそんなことを言われた。

いや、だって。春には彼女が……手繋いで楽しそうにしてたじゃない……。

「おーい。さやちゃん」

「ああ、ごめんごめん。なんか変な言葉が聞こえたから」

「いやひどいよ。今の、人生初の告白だったのに」

さらっと言われた告白は、もちろんムードなんかなくて、少し顔の赤くした余裕なさげな春の顔を見たら、なんだか現実味を帯びてきた。ちょっとだけだけ。

「こ、くはく？ でも春彼女いるじゃない。この間手繋いで……」

「あー。あれは幼馴染兼「藤遥斗」の担当様です。手繋いでたのは……なんだろ。あれ昔からしてるからまだ抜けきれてないのかな。無意識だと思う」

「昔付き合ってたとかないの？」

「あ、うん。元カノ」

。こんな男絶対やだ。

元カノと平気で手をつなぐ男なんて。

「え、さや？　なんか表情冷めていつてない？　気のせい？　俺が好きなのはさやだよ？」

「……………それ、信じてるって？」

「てか、信じてくれないと困る、かな。俺、さやと付き合いたいし照れたように視線を逸らす春に、つい私も赤面してしまう。なんでそんなに真剣に言うの……………」。

「ね、さや、付き合おうか」

いつもははずかずか図々しいくらいしでかすくせに。

こんなときだけ私の意見聞くなんて、ずるい。

高校二年の3月。

私と春は付き合い始めた。

第二話

好きな人が、自分を好きになってくれる確率なんて本当に低くてそんなこと、この世に稀にある奇跡に等しい。

って、私は思っていた。だから、嬉しかったよ。

告白された瞬間はね。

「じゃあ、春。またくるから」

晴れの日の空港。高校を卒業した私は、地元の企業に見事合格。

それで、今日、地元に戻るのだ。

「う、嫌だ。なんで行っちゃうんだよ。居ればいいだろ」

「こら。春言ってたでしょ。「俺とさやなら遠恋100%大丈夫」
って」

「そうだけどさ」

まだブチブチ言っている春は放っておこう。

本当は、私も考えていた。この東京に残ること。春と同じ土地で働いて、ずっと一緒に居られたらどんなに楽しいだろうって。

けど、それじゃダメだなって思って。

一度はちゃんと自分の足で歩かないと、私は弱くなってしまっ。

だから離れようと決めた。

「浮気、すんなよ?」

そのふたえの目を曇らせて不安そうに言ってくる。ちよっと、い

やかなり不安みたいだ。

「私はしないよ」

「俺だつてしない」

「絶対？」

「絶対」

さつきとはうって変わって、強い表情で言つてのけた。

春ってほんと、ワソコ。

「じゃあね、春。今度来るから」

「……ん。行つてらっしゃい」

柔らかく微笑んだ春を最後に見て、私は背を向けた。

春と付き合い始めて一年とちょっと。私たちは付き合い始めのよ
うにラブラブなままだ。

不安はある。それは、あの女の人のことだ。これは先日知つたこ
とだが、あの手を繋いでいた幼馴染兼担当の女の人は、「麻里さん
という名前らしい。その麻里さんの電話の時、なんのためらいも
なく彼女に「好きだ」と言っていた。私の前だったから他意はない
んだろうけど、うん。不安要素ではある。

「……ううん、たぶん……」

春は、もしかしたら……。

考えていたら気持ち沈んできた。やめよう。考えないでおこう。
彼女は私じゃないか。

高校卒業後の春。

私は春と離れて、実家に帰った。

パサつ、と。

肩にかかる毛布の重みで目が覚めた。

「……だれ……?」

「あ、悪い、起こしたか」

「孝宏?」

「まだ寝てていいぞ。弘樹は俺が見てるから」

いつの間にか寝ていたようだ。しまった。せっかくの弘樹との交流の時間だったのに。

「今何時?」

「七時半」

「起きる。仕事あるし」

ゆっくりと起き上がると、薄ぼんやりしていた意識がはっきりとして、孝宏の顔がよく見えた。

横で分けた前髪に高い鼻筋。くつきりとしたふたえの目。白い肌と高い身長。ツンツンと立てた髪型がよく似合う男だ。

そんなハーフな顔立ちの美形な孝宏とは小、中が一緒に、仲が良かった。で、今もお世話になってるのだ。

「お前……疲れてないか? なんかもまた痩せたな」

「そう? 学生時代太ってたからそう思えるだけでしょ」

「いやいや。まあ確かに太ってたけどそうじゃなくて。たまには休めよ?」

みんなそう言うってくるけど、私自身、本当に疲れたと思ってない。それに休んでいる時間なんかないのだ。

「ぱぱー! こえ見てー!」

「お、なんだ弘樹、いいもの持ってんな」

弘樹の呼び出しに笑顔で応じた孝宏の背中が遠のく。

みんなに支えられてるな、と思う。迷惑かけてるな、とかも。情けない。私変わってない。

準備をしようと立ち上がると、ひときわ大きな弘樹の嬉しそうな声が聞こえてきた。

「ひーくんと!？」

「そうそう。楽しそうだろ？」

「うん! ままー! いつ行くー!？」

「あ、こら弘樹。ままは疲れてんだから連れては行かないぞ。俺と弘樹と……あとは、ばあばとか遼兄ちゃんとかと行くんだよ」

「えー……ままとはぱと三人で行きたい」

「何? なんの話なの？」

「どうやら、今度の孝宏の休みの日に弘樹を遊びに連れていってくれるらしい。」

「遼というのは私の兄で、今は、どこだっけ、まあ県外に行っている。まあ孝宏も気休めでその名前を出したんだろうけど。」

「いいよ、別に。弘樹には全然構ってあげてないし。いつ行けるか分かったらメールしといて。調整してみるから」

「シャワー浴びなきゃな、とか思いながらバスルームに向かうと、慌てて孝宏が追いかけて来た。」

「ちょ、待て。お前、大丈夫か? 最近ほんと顔色悪いし、何か覇気がないっつーか……とりあえず、休める日は休んだ方がいいぞ」

「大丈夫なんだって。顔色が悪いのは私が色白だからそう見えるだけですよ。お母さんも孝宏も心配しすぎ。それより、シャワー浴びるんだけど、出ていってもらっいいい？」

話しながら歩いていたために、今居るのは目的地である脱衣所。

孝宏はハツとした様子で脱衣所を出ると静かに戸を閉めた。

「……なあ、父親、どこに居んだよ」

「聞こえたのはすぐ外。まだそこに居たらしい。」

「聞いてどうするの?」

「十発くらい殴ってやるうかと思って」

「つい吹き出してしまった。だって、十発って。まあお母さんは「殺す」って言ってたけど。」

「良いんだって、別に。これは私が決めたことなんだから、あの人は悪くないの。それに弘樹の存在も知らないし。もうなにもあの人が悪くないの。それに弘樹の存在も知らないし。もうなにもあの人が悪くないの。」

は関係ないんだよ」

「……じゃあそろそろ結婚してもいいんじゃない？」

下着を脱ぎ、つい固まってしまった。

考えなかつたわけじゃない。でも、まだ春以外の男は考えられなくて。

「……考えてみるよ」

嘘。本当は考えるなんてできない。

つぶやいて、私は浴室に入った。

だって、あまりにも大きすぎた。彼の存在は、私の中で、何より大きかった。だからこそそれを失った穴は、他のものなんかじゃ埋まるはずも無くて。

熱いお湯が降る。それをただぼんやりと浴びながら、この四年間を考えた。

付き合いだして一年と少し。私ももう19になり、職場の雰囲気にも慣れてきた頃。

もう何回目か。この一ヶ月の「記念日」を一緒に過ごせないのは。

『仕方ないよ。仕事あるんだから』

「だけど、ちょっと寂しいかも。だいたい、「一ヶ月記念日」は一緒に過ごそうって言い出したのは春なんだからね」

『あはは、そうだったね。でも俺も寂し……』

そこで、背後からアシスタントさんだろうか、男の人の急かす声が聞こえてきた。

「え、もう？ わかりました……ごめんさや、俺描かなきゃ。もうアシさんがカンカン。ごめん」

「ううん、大丈夫。頑張ってね」

「ありがとう。じゃあ」

プツと。そんな終わりを知らせる音が虚しい。

いつからか、春は電話を先に切るようになった。最初の頃は私が切るまで待っていたのに。

「……なんか、平気そうだし……」

寂しいなんて思ってるのは私だけ。いつも楽しそうな声で寂しいと吐く春。なんだか距離が出来た気がする。

何が遠距離100%大丈夫、だ。

悪態についても、心はやはり傷むまま。

以前の自分の言葉が突き刺さった。

『男か女が浮気して終わり』

もう終わりに近づいていつているのか。溝は深まって、きつと戻らない。

どうしよう。どうしよう、わからない。どうしたら春は戻ってくれる？ どうしたら春は私をまた見てくれる？

やっぱり遠距離なんて無理なんだ。こんなにも本気にならなければ良かった。なんでこんなにも溺れたのか。ああ、馬鹿みたいだ。

考えても結論は出なくて。

どうしても確かめたくなった。

会いに、行く……。

話し合つのが一番だと思った。ううん、そうじゃない。もしかしたら、会うことで私をまた見てくれるかもしれないって思った。

つまりは、必死なのだ。

一ヶ月で記念日をしよう、と言ったのはもちろん春。私は「馬鹿らしい」なんて思っていたけど。今では逆かもしれない。私の方がその日を重要視している気がする。

春にとって今「恋人」というのはただの「鎖」なのかな。

東京に再び行くのは、来月の記念日にした。

「爽香！ 久しぶりー！」

行きたくて行きたくなくて。会いたくて会いたくない、なんて思ってる私を無視して、無常にもすぐに一ヶ月が経ってしまった。

でも、朋子に会えたのはすごく嬉しい。連絡はとってたけど、会うのはもう一年振りだったから。

「朋子ー。久しぶり、髪伸びたね！」

「あんだだっ！ 背伸びたね！ 元から高かったけどさ」

「もう168ですから」

「すごいわ！ 迫力美人でいい感じ！」

懐かしい感覚がむずがゆい。たまにはこんな感じも悪くない。

「あ、そういえば爽香、こっちにはいつまで居んの？」

「今日中には帰るよ。仕事無理してこっち来たから」

「……そっか。今日、頑張った」

「ありがとう」

いちおう、朋子には話してみた。朋子は無理に励ましたりせず、ただ事実を言ってくれるから。今回のことも「彼は単に今が楽しいだけかもしれない。でももしかしたら爽香以上を見つけたのかもしれない」と言っていた。それは全く私の意見とおんなじで。

「じゃ、行ってくるよ」

時計は12時を示している。家には居るだろう。

行つてらっしゃい。と朋子に見送られ、私は春の家に向かった。途中、いろいろなコトを考えていた。

家に行つたら浮気現場だつたらいやだな、とか。私見てどんな顔するのか、とか。

でも結論は全部いいものじゃなくて。全部最悪な結果に終わった。悶々とする私の前には、見覚えのあるマンション。ああ、もう。着くの早いよ。

いざ着いてみると、足が動かない。どうしよう。でも帰るなんてできないし……。

「……さ、や？」

背後から呼ばれた。

私を「さや」と呼ぶ人間は、知る限り一人しかいない。

「……春、久しぶり、だね」

「さや！」

恐る恐る振り向き少し笑顔で言葉を返すと、春が笑顔で走ってきた。

それはもう、本当に嬉しそうな笑顔で。

「久しぶり！　なんで居んの！？」　仕事でこつち来た？　また背伸

びたな！　でも俺よりは低いけど、相変わらず美人だし、いや前よ

り綺麗になつた？」

「春、落ち着いて」

「落ち着けるか。上がつてくよね？　ちよつど昨日原稿あがつたと

こなんだ。今日は一ヶ月記念日だし、ラブラブしよ！」

「え、ちよつと！」

手をつかまれ、勢いのまま引つ張られる。手を繋ぐのは久しぶりだ。顔が熱くなるのを感じながら、引かれるままに春の部屋まで連れられた。

態度はまったく変わらない。以前のままだ。

「ちよつと春！　展開が早くてついていけないんだけど」

「まあ座って。俺がコーヒーいれるよ」

「いとかの時とは逆だね、とでも言いたげに優しく微笑む春に、私は何も言えなかった。」

「春は変わった。なんか、すっかりしてる、とでも言うのかな。なにが春を変えたのかはわからないけど。」

「変わってると言えば、春こそ身長が伸びている。前までは私より5センチくらいしか変わらなかったのに。今では私も伸びたというのに、前より見上げている気がする。髪も伸びたし、キリツとしてるし。相変わらず細いのと色白なのは変わらないけど。」

「春、最近人気すごいよね。なんで表に出ないの？」

「目立ちたくなんだよ。俺、そういうの苦手だから」

「ふうん」

「ほかの人なら絶対前に前に出ようと思うけどな。そんな面では春は変わってないみたいだ。」

その日は4時までしか居れなかったけど、本当に甘い時間を過ごせたと思う。まあ、朋子に「何したの」とか聞かれたら「大人の時間だった」とだけ答えとこうかな。

それから朋子と合流。時間が迫っていたために、そのまま空港に向かうことにした。

「今度は朋子と遊ぶためにこっちに来たいな。」

「でも、よかつたね、勘違いで」

「うん。また来るから、そのときゆっくりしようね」

「詳しく聞かせなさいよ？ って、あれ？ あんたネックレスは？」

「朋子その言葉で初めて気づいた。」

「春の部屋に、お揃いで買ったネックレスを忘れたのだ。」

「うわ。まだ間に合うかな、時間」

「大丈夫大丈夫。ほんとにギリギリだったら私たち歩いてないって」

笑いながらそう言う朋子に見送られ、私は春のマンションに戻る。あれは大切なネックレスだ。距離が離れた私たちをつなぐ、唯一の「モノ」。だからたとえ飛行機に乗り遅れたとしても待つて帰りがたかった。

そんな気持ちで走っていると、

「 や！ どっちが 信じ 」

叫んでいるような声が聞こえた。それも、春のマンションの近くからだ。いや、春のマンションに近づくとつれてそれはだんだんと大きくなっていくことから、マンションの下で男女が口論しているのだと理解した。

だれだろう。

なんて思っで見ると、それは見なくなかったツーショットで。

「もう嫌なの！ あたしが一番つて言ったくせに！ あたしが好きつて言ったくせに！ まだあの女と繋がってたんだ！？」

「ちが……あれは」

「言い訳なんて聞きたくないの！ あの女と寝た部屋に私をよく上げれたね！ ああ、逆？ 私は「浮気」だもんね。私と寝た部屋に、よく彼女上げれたね！」

脳処理が途端に遅くなる。

あの二人は何を言っている？

寝た？ 浮気？ だつてあれは、春と麻里さんでしょう？

「こんなもの部屋に残して……あたしに何が言いたかったの？ 彼女とラブラブですつて言いたかった？ あたしとはもう終わりだつて、そう言いたかったの？」

麻里さんが持っているのは、私が忘れて帰ったネックレス。同じものが春の首から下がっている。

「ごめん、ごめん麻里。もうしない。だから泣くなよ」

「うるさい！ もう嫌なの……もうこんなあやふやな関係、嫌……」
動いたのは春。麻里さんからネックレスを奪うと、彼女の目の前で引きちぎった。

「遠距離な私たちを繋ぐ唯一のモノがバラバラと散る。

私はぼんやりと見ているしかできない。だって。だって、春が、今。なんで……。」

「これも、要らない」

「そう言つと、自分の首にあつたそれもバラバラにした。」

「春、樹……？」

「俺には麻里だけだから。ごめんな、迷つて。もう決めたから。別れるよ」

「抱きしめ合う二人をただ眺めるしかできない。」

「今、あの世界にはあの二人しか居なくて。春を殴つてやることもできなくて。」

「傷つく暇もなかった。」

「だって。だって、春。なんで？ 嬉しそうにしてたじゃない。好きだって、なんでも言ってくれたじゃない。愛してるって。優しく私に触れたじゃない。」

「なんで？ どうして？ いつから？ 別れるの？ 私たち、終わったの？ 100%大丈夫じゃなかったの？」

「ねえ、春。なんで？」

「あ、ちよつと待つて爽香！ あたしここで待つてたんだよ、って、え？ どうしたの？ そんな顔して」

「気が付けば走つていたみたいで、気が付けば朋子が居た。」

「ぐちゃぐちゃして、なにも考えられなくて、朋子になんて言えばいいのか分かんなかったから、とりあえず要件だけ伝える。」

「……終わつたみたい」

「全部。今までのことも、全部。」

「え？」

「浮気されてた」

「は！？ ……相手は？ 例の幼馴染？」

「返答しない私の態度を肯定と取つたのか、朋子が歩きだした。」

「ちよ、どこ行くの？」

腕を掴むと反動で朋子が振り向く。

それは、見たことのないほど険しくて。

「決まってるでしょ？ 全力でぶん殴ってやる！」

「やめて、大丈夫！ 私は大丈夫だから！ 春を傷つけないで」

「だって……あんた、自分がどんな顔してるかわかる！？ すごく傷ついているの！ なんであんたが一方的に傷つけられてあいつがのうのうと幸せに暮らしてんのよ！」

いいんだよ、もう。

麻里さんを抱きしめた時の春の顔、私と居る時と違ってた。あんな顔、私はさせてあげれない。

だからもう、どうしようもないんだなって、本気で思った。

好きな人が、自分を好きになつてくれる確率なんて本当に低くて。そんなこと、この世に稀にある奇跡に等しい。

嬉しかったよ、春。

一瞬でも、私のコトを好きになつてくれていたなら。

春の心に、少しでも映れていたなら。

もう、私たち、終わりだね。

第三話

今日で一ヶ月。あの光景を目にして、春から「別れる」発言が出て、もう一ヶ月が経った。

春からはなんのアクションも無い。

私から言われるのを、待っているのだろうか。

「どうしたの、沖田さん。悩ましいね」

一年先輩の平井さんが隣のデスクに腰掛けながら、私の顔をのぞき込んできた。

平井さんはポツチャリとしていて、でも目とかくりくりで、なんだか癒やし系な存在だ。今はその可愛らしい眉がフニャっと下がっている。

「……えーと、そうそう。生理が遅れてて。なんだか不安なんですよ」

「生理が？ 大丈夫なの？」

「はい。とりあえずは大丈夫です」

「そういえば昨日のお昼、あんまり食べてなかったね」

「最近食欲無くて。入らないんです」

そう言つと、平井さんは眉を寄せて何かを考え出した。

でも今の私はそんなこと気にしてられなくて。春のことで頭がいっぱいだつた。

このまま振られるのを待つか、もうこちらから振るか。

いや、春のためにもきつと後者がいいのだろう。そう思って電話をかけようと携帯を取り出すけど、どうしても発信できない。ボタンを押すだけ。それだけの行為なのに、指が固まる。この一ヶ月、何度も何度も試みた結果がそれだつた。

本当は嫌なのだ。春のため、春の幸せのため、なんて偽善を吐きながら、私は私のわがままを通して春との関係を絶てない。

早く別れないとダメってわかつてるのに。

「沖田さん、思ったんだけど、その体調不良って……」

「平井さん、私今日早退出来ますか？」

迷ってても仕方ない。

今日、しよう。

できないかもしれないけど、できるかもしれない。その可能性に賭けてみないと、きっとこれから先、私は進めない。

「え、あ、今日は比較的暇だしね。沖田さんいつも頑張ってるし、鈴木さんに伝えたら大丈夫だと思うよ」

鈴木さんに早退を希望すると、平井さんの言ったとおり快く帰してくれた。

帰り際、平井さんは私に何か言いたげだったが、私はそんなことに構っている暇も余裕もなく。とりあえず「お疲れ様でした」とだけ言っておいた。

帰り道はぐるぐるといろんなことが頭を巡って、家に着く頃には何を言いたいのかわからなくなってしまった。ある意味緊張がほぐれていいと思うけど。

誰もい居ない家に入り、自室に向かう。

「……よし」

携帯を取り出して、ゆっくりとボタンを押した。

「……これで、終わるの。大丈夫。これで……」

発信ボタンに指をのせる。

「これで、終わるの……」

親指に力を込める。

でも、動かない。

「……はやく、押しなさい……」

動かない。

「終わらせれば楽になれるから……」

まだ、動こうとしない。

「お願い……もう苦しいの……」

カチッ、と。

やっとのことでそれは動いた。

そのことに一番驚いたのは私自身。まさか本当に押すなんて、ど、どうしよう。

切ろうと通話終了ボタンに親指を持っていった瞬間。

『もしもし?』

懐かしい声が聞こえた。

『……さや? さやだろ? どうした? こんな時間に。仕事は?』

……さや?』

声が、出ない。

どうしよう。まさかこんなに早く出るとは思わなかった。たったのツーコール。春も仕事で忙しいだろうに。これは「早く別れる」という神様の啓示だろうか。

「あ、えっと……久しぶり。元気、だった?」

早く言った方が楽なのに。それでもすぐには言い出せなくて。

『元気だよ。この一ヶ月連絡くれなかったから、何かあったのかと思っただけ。』

じゃあ連絡くれればよかったのに。

そうしなかったのは、麻里さんが大事だからでしょう?

さっきまで高ぶっていた気持ちも、どんどん冷めていく。

『さや。……どうした? 何かあった?』

「……どうして?」

『元気、ないから……』

「……別に、元気だよ。……えっと、今、一人?」

『? うん。最近仕事を手につかなくて……麻里もアシさんも怒ってるんだけどね。でも今は誰も居ないよ。……それがどうかした?』

麻里、という名前に、肩が揺れた。

どうしよう。早く、言わないと。でも、なんて言えば……。

「……話が、あるの……」

私が静かにそう言うと、かなりの間の後。春の低くなった声が答えた。

『なに?』

空気から察したのかもしれない。

振られるのはプライドが許さないのだろうか。でもそんなプライドに戸惑っている余裕は一ミリもない。

この一年とちょっとを、今から終わらせるんだから。

『……好きな人が、自分を好きになってくれる確率って、すごく低いんだって。もう、奇跡って、くらいには』

『……うん?』

「だから、せつかく両想いになれたんだったら、そのチャンスをしちゃダメって、私は、思う……」

『 だから?』

ゆっくりと息を吸った。

一言。文字にすれば四字。

その言葉を、吐き出す。

「別れよう……」

無言。なんの雑音もない通話先で、そこに居る人物からは動揺の色は感じ取れない。

やっぱり、分かっていたんだ。

そして、待ってたのかも。

ならこの言葉は春にとって念願のものだ。

『 ……なんで?』

つぶやくように言われた言葉は、私の鼓膜にあたって残響を残す。なんで? そんなの、春が知る必要があるの? 春がそれを聞くの? 嬉しいくせに。万々歳なくせに。なんで、なんて興味ないくせに。

『好きな人に好きになってもらったから、俺は要らない？ ……その奇跡に、俺は邪魔？』

どの口がそれを言うのか。

好きな人に好きになってもらったから要らないのは、私でしょ？ その奇跡に邪魔なのは、私でしょ？

春。私が何も知らないと思ったらダメだよ。もう全部知ってるんだから。引き止める演技しろって、麻里さんに言われた？ 形だけでもしとけて。そうしたら怪しまれないからって。

どんどん嫌な女になっていく。そんな自分が大嫌い。

「……もう、いいの。疲れた。これ以上、苦しみたくない」

『わからないよ、さや。はつきりなんでか言ってくれないと、俺、納得しない』

「疲れたんだよ……充分な理由でしょ」

『不充分』

なによ。なんでそんなに止めるの。そんな演技いいんだよって、全部話して言ってみてやりたい。でも、言わない。それは私のけなしのプライドだ。

浮気されたから別れる、なんて、同情的にはなりたくないから。……じゃあ、私が春の部屋に忘れたネックレス、送ってくれるなら、話すよ」

無理でしょう？ だって、ちぎったもんね。私の目の前で。彼女の目の前で。ご丁寧に、自分の分まで。

『……ああ、あれ、なくしたんだ。無理だよ』

ウソツキ。

『さや。……俺のこと、嫌いになった？』

過ぎったのは、麻里さんを抱きしめていた時の春の幸せそうな顔。……ずっと、幸せにね」

その言葉のすぐあとに、迷いなく切った。

嫌いだって言えたらよかったのに。それなら後味も良く、春も私と別れた。

泣いてなんかやらない。絶対に、泣かない。

本気で将来を考えた人。本気で好きだった人。もう手は届かないけど。

絶対、泣かない。

これも私のプライドなんだろう。

「携帯、替えよう」

電源を落とす、明日にでも携帯ショップに行こう、と決意すると、重力に逆らわないままぶたが降りてきた。

……疲れた。

別れはあっさりしている。一年とちょっと付き合ってたのに。「別れよう」って言っただけで、繋いでいた関係が消えた。

社会人一年目の秋。

ずっと好きだった人と、別れた。

気分が悪い。

そう思ったのは、別れてから数十日が経った頃だった。ご飯が喉を通らない。吐き気にめまい。最初は春との別れで精神が不安定なのかな、とか思ったけど、これはあまりにも度が過ぎていく。

ああ、また。吐き気。

「大丈夫？ 沖田さん、朝から顔色悪いけど……」

「大丈夫、と、言いたいんですが……大丈夫じゃないです」

お昼休み。ご飯を食べる気にもなれずひとり休憩所で座っている

と、平井さんが心配そうに入ってきた。

「……沖田さん、病院行った方がいいよ」

「でも近所に内科なくて……遠くになっちゃうんで面倒なんですよ」
「こんな状況で「面倒」と言うのも気が引けるが、でも私は生粋の
「めんどくさがり」だと自負している。もちろん仕事ではちゃんと
してるけど。」

「……沖田さん……」

「はい？」

「産婦人科、行って」

「へ？」

さんふ、じんか？ なんで体調が悪いだけで産婦人科に……？

「それ、子供が出来たんだとおもった
時が止まった。気がした。」

だって。子供って。私に？ 誰の？

思い当たるのは約二ヶ月前に行われた行為。でも、最後の、あれ
が……？

半信半疑。っていうか、まったく信じないまま。後日産婦人科に
向かった。

妊娠なんて無縁だと思って考えたこともなくて。
なのに。

「妊娠五週目ですね。おめでとうございます」
真っ白になった。

どうしよう。産みたい。でも、産んでいいのだろうか。別れた男
との子供。勝手に産んで、春にとってこの子は疎ましいこにならな
いか？

「おい、固まん。先生困ってんだろ」

「え、あ、すみません。全然実感なくって」

「いえ、最初はそんなもんですよ。ここに来る人はみんなそう言っ
ています。いきなり「お母さん」になるなんてわかりませんよね」
「は、い」

「ですが、その命を守るために、今から言うことは守って下さいね
まず」

まったく聞いていない私のかわりに、今日ついてきてくれた孝宏
が話を聞いている。

先生は私と孝宏の子だと思っているんだろうか、孝宏に父親のこ
とも語りだしている。

「ありがとうございます」

「はい。また来てくださいね」

「はい」

病院を出てもまだフラフラとしていた。

この、お腹に。

春との子供が……

「……産むのか？」

孝宏が遠慮がちに尋ねる。

産みたい。産みたいよ。

車に乗り込むと、エコ発進で進み出した。運転は孝宏。私はまだ

免許がないのだ。

「……産んで、いいのかな……」

「なんで？」

「だって……これは春との子で……春にとっては邪魔な子で……そ
れを勝手に、私が……」

「じゃあ堕ろすか？」

「い、いや！」

堕ろしたくない。殺したくない。春との子っていうのもあるけど、
何よりこの「命」を消したくない。何億分の一の確率。そんな確率
で出来た「人」を、この世界を見せないまま殺すなんて嫌。

「……大丈夫。俺がいる。おばさんもいるし、遼さんもいる。あと、
あの人……ひらい、さん？ もいるしな」

「……産んでいい、の？」

「お前の子だ。お前が決める」

決める、なんて、もう決まってるのに。

お母さんには全部話した。

この子の父親と別れたこと。父親はこの子の存在を知らないこと。私はこの子を産みたいということ。全部話して、お母さんの怒りの言葉を待つ。

が、

「あなたの人生あなたが決めなさい。ただし、途中放棄は許さない。いい加減な気持ちで子育てなんてできないよ」
泣きそうになった。

お母さんは偉大だ、なんてよく聞くけど、やっぱりそうで。
本当、お母さんの元に生まれてよかった。

それからはコトがトントン拍子に進んでいった。
数ヶ月後には仕事を産休で休んで、性別が男の子だと分かって。
あっという間の一年。

気が付けば、また秋が巡ってきて。

20歳の秋。この世に「弘樹」が誕生した。

「まー！ おきてー！」

ずっしりとした、それでもまだ軽い弘樹が私の上に乗る。
昨日寝たのは朝方の三時半。今はまだ七時だ。……眠い。

「まー。今日はピクニックでしょー？」
「え、あ、今日だけ……ん、ごめん、起きるよ……」

ゆっくり起き上がると、弘樹は嬉しそうに走って部屋を出ていった。

なんの夢を、見ていたっけ。

ひどく懐かしくて、悲しかった気がする。

まあ、別に悲しい夢なら思い出せなくていいのだけど。

「おう、おはよう。睡眠時間足りてるか？」

「……おはよう孝宏。大丈夫よ。泊まってくれたんだ？　ありがとう」

「俺が泊まるの、おばさんも慣れたみたいだ。自然に飯が出てきた」
「もうすっかり家族だね」

本当、孝宏には迷惑をかけてばかりいる。

「ごめん、ありがとう。今日も休日返上で……」

「いいって。お前、もっと頼ってもいいくらいだぞ」
？

悲しそうに笑った孝宏の心境は分からないまま。ぽかんとしている私を置いて孝宏は出て行ってしまった。

それにフリーズしてしまった私は、数秒の後、階下から聞こえる弘樹の笑い声で我に返った。

そうだ。準備しなきゃ。

いそいそと着替えながら、お弁当は孝宏が作ったのかな、なんて考える。仕事もあるし、さらにバンドを組んでいる孝宏に子守をしている時間はないだろうに。ここに来ると孝宏はすっかり主夫だ。ありがたい、と同時の罪悪感。

私たちはもう23で、まだ早い結婚について考えてもいい歳。その大切な時に、私は何をさせているのか。

動きやすい格好に着替え、下に向かう。

すると、弘樹を抱っこした孝宏がすでに準備を整え待っていた。

「お、弘樹、ママが来たぞ。もう少し待ってようなー」
「あーい！」

微笑ましい光景にほんわかとしながら洗面所に行く。ゆっくりもしてられないために、急いで洗顔と歯磨きを済ませた。

弘樹と遊びに行くなんて、いつ以来だろう。うっん。こっやってちゃんとは連れていったためしがない。行ったとしたら近くにある公園くらいだ。

「お待たせ。行こっか」
「わーい！」

既に靴を履いていた弘樹は勢い良く玄関から飛び出していった。

今はもう寒い冬。子供は本当に元気だな、と今更ながら痛感した。

「今日、無理なら車で寝とけよ」

「無理って？」

「昨日帰ったの遅かったろ。だから、寝れてないだろうし。車で寝てればつつつたの」

お弁当はやっぱり孝宏が作ったらしい。そのお弁当が入った大袋を持ち上げ、玄関を開けて靴を履いている私を待っていてくれる孝宏に、つい笑みがもれた。

「……なんだよ」

「いや、なんか、どっかの執事みたいで」

「なんだそれ」

ムツとした孝宏のその顔は、別に怒っている訳じゃなくて。

可愛いな、とか、思ってしまった。

「褒めたんだよ。孝宏みたいな旦那さんと幸せになれるんだろうね」

きっと孝宏の彼女は幸せだろう。友達でさえこんなに良くしてくれるのだ。恋人ならもっともつと甘いに違いない。

……あれ？ そういえば、私……

「孝宏。そういえば彼女って……」

いたっけ？ とか、今更孝宏の謎めいた色恋事情を聞いてみよう

と顔を上げた。
その先には、

「結婚、するか？」

真剣だった。今までそんな孝宏は見たことなくて。

何を言われたか理解する頃には孝宏が私の前に座り込み、目線を合わせていた。

「孝……」

「俺は、それでもいい。中学卒業して、高校離れて、会わなくなつて、後悔して……どんなに仲が良くても、「学校」って繋がりがなくなれば意味ないんだって知った」

真剣な眼差しは揺るぎなく、まっすぐに私を見つめてくる。

「久しぶりにお前に会ったのは、偶然なんかじゃない。会いたかった。だから……、」

そこでふいに言葉を切ると、孝宏がスツと立ち上がった。

「戯言だと思つとけ。……ただの冗談だよ」

私の頭をふわりと撫でると、孝宏はそのまま私の手を引き立ち上がらせてくれた。

「冗談、なんて、嘘でしょう？」

鍵を閉め、孝宏の背を見つめる。弘樹と戯れている孝宏はいともと変わらなくて、さっきのがまるで嘘のようだ。

本当に、冗談……？

でも、もし、冗談じゃなかったら？

チャイルドシートに弘樹を乗せ、私も助手席に乗り込む。みんなが乗り込んだことを確認すると、車は孝宏らしい安全運転で走り出した。

もし。もしも、冗談じゃなかったら。

私、今まで酷いことをしていた。

産婦人科と一緒に行き、他の男との子供の子守をさせ、他の男を想

う私の側に居て。それは。

なんて、残酷なんだろう。

私は、支えてくれていたあなたを、
どれほど傷つけていたんだろ
う。

ねえ、孝宏。

あなたのために、私は何ができる？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3579y/>

失くしたのは大切な、

2011年11月19日20時34分発行